

| | |
|------------------|---|
| Title | 修験道における宗教儀礼の構造 |
| Sub Title | The structure of religious rite in shugendo (excertis from doctoral dissertations) |
| Author | 宮家, 準(Miyake, Hitoshi) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1970 |
| Jtitle | 哲學 No.55 (1970. 3) ,p.237- 247 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 博士學位論文審査の結果の要旨 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000055-0237 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《 博士学位論文審査の結果の要旨 》

「 修験道における宗教儀礼の構造 」

宮 家 準

内 容 の 要 旨

修験道は、我国古来の山岳信仰が外来の諸宗教の影響のもとに平安時代末に至って、一定の宗教体系を形造ったものである。爾来この宗教は、成立的な組織を持った宗教として、特に庶民の宗教生活に大きな影響を及ぼして来た。こうしたことから修験道の研究は、日本庶民宗教解明の鍵をにぎるものとされ、宗教学のみならず、隣接諸科学からも注目されている。

けれども従来修験道研究は、概括的なものや教団史をのぞいては、ほとんどすすめられていない。本論文は、修験道の中核をなす宗教儀礼を研究対象としたものである。その際筆者は、修験道における宗教儀礼の構造を次の立場にたって分析し、さらにその意味を、日常的社会の層位においてではなく、特に修験道の宗教的世界観との関連において解明することをこころみた。

すなわち、修験道儀礼は基本的には、修験道の宗教的世界観を象徴する symbol system であると把握する。そして修験道儀礼中の諸行為、諸装置等を symbol system を構成する symbolic-action としてとらえ、その意味を修験道の宗教的世界観と関連づけて解明する。次に所定儀礼中の種々の symbolic-action や symbol の意味が、いかなる主題のもとに（モチーフ）どのように相互に関連しあっているか（メカニズム）を分析し、これを所定の修験道儀礼の構造としてとらえる。そして修験道の宗教的世界観との関連においてこの構造の意味を解明するのである。

「修験道における宗教儀礼の構造」

こうして筆者は、従来主として歴史的あるいは民俗学的分野においてのみあつかわれてきた修験道儀礼を、修験道の宗教体系の中で、その宗教的世界観との関連から分析、解明することによって、儀礼の施行者すらきづかないことの多いその構造を把握した。

すなわち、上記の方法にもとづいて、修験道における全儀礼体系を構成する入峰修行、験術、不動法、神祭、日月星、小祠の祭、卜占、巫術、憑祈禱、調伏法、憑きものおとし、符呪、まじないの諸儀礼の構造を諸資料及び実態調査にもとづいて分析、解明し、次の結論をえた。

修験者は、まず入峰修行や不動法によって、不動明王と霊能的な働きの上で同化 (identification) し、その力を行使し得る能力を獲得しておかねばならない。そして験術に見られるように、その能力を信者に顕示することも行なわれる。また神祭によって、常時崇拜対象と交歓 (communication) している。

修験者はこうした準備の上で、主として信者の災厄除去の依頼に応えて、卜占、巫術、憑祈禱を行ない、災厄の原因を知る。これらの中でも憑祈禱は、特に修験者が好んで行なった儀礼である。これは、修験者が崇拜対象と同化した上で、その眷属を駆使して災厄の原因を知るというものである。なお災厄の原因は多くの場合、生死霊、邪神、邪霊のせいになされている。

災厄の原因がわかると、これをのぞくための儀礼がなされねばならない。その為の最も一般的な方法は、息災護摩、諸尊法、日月星、小祠の祭のように崇拜対象に祈願をこめるものである。けれども修験道では祈願よりも、修験者が不動明王と同化した上で、地主神的性格を持つその眷属を使役して、邪霊、邪神の邪悪な活動を止めさせる調伏法、憑きものおとし、符や呪具を操作して同様のことをする符呪、まじないの方がより広く行なわれている。

このように修験道の儀礼は、全体として見ると、修験者が崇拜対象と霊

能的な働きにおいて同化 (identification) し、その眷属を操作 (manipulation) し、災厄の原因が邪霊邪神のせいであることを知る。そしてそれをのぞくことによって災厄を除去 (exorcism) するという構造になっている。

こうした修験道儀礼の構造は、現実世界を支配する日常的なものをこえてこれと区別される超自然的な霊界における、普遍的神格と地主神的性格を持つ個別的神格及び災厄のもとになる邪神、邪霊という三種の神格の存在と、修験者が修行の上で普遍的神格と同化し、個別的神格を使役することによって、邪神、邪霊を制御することが可能であるという考えを支える宗教的世界観を基礎にして成立している。

以上主として修験道儀礼の symbol system を、修験道の宗教的世界観との関連から解明した。しかし、これを逆にいえば、修験道の宗教体系内において修験道儀礼はその宗教的世界観を動的に位置づけ支えているのである。

付

「修験道における宗教儀礼の構造」

| | 目 次 | 頁数 |
|-----|------------|-----|
| 第一章 | 修験道研究の問題点 | 1 |
| 第一節 | 修験道の問題点 | 2 |
| 一、 | 修験道の性格 | 6 |
| 二、 | 修験道の問題点 | 41 |
| 第二節 | 修験道研究上の問題点 | 75 |
| 一、 | 修験道研究の歴史 | 76 |
| 二、 | 本研究の立場 | 113 |
| 第二章 | 修験道儀礼の研究方法 | 141 |
| 第一節 | 研究対象 | 142 |

「修験道における宗教儀礼の構造」

| | |
|------------------|------|
| 一、修験道儀礼の性格 | 144 |
| 二、修験道儀礼の問題点 | 177 |
| 第二節 修験道儀礼の研究方法 | 212 |
| 一、修験道儀礼研究の立場 | |
| —宗教儀礼研究上の本研究の位置— | 213 |
| 二、宗教儀礼の問題点 | 225 |
| 三、宗教的 symbol | 239 |
| 四、宗教儀礼の構造 | 260 |
| 五、宗教的世界観 | 285 |
| 六、宗教儀礼の機能 | 307 |
| 七、修験道儀礼の研究方法 | 328 |
| 第三章 修験道の修行と験術 | 377 |
| 第一節 修験道の入峰修行 | 378 |
| 第二節 修験道の験術 | 481 |
| 第四章 修験道の祭 | 567 |
| 第一節 修験道の不動法 | 568 |
| 第二節 修験道の神祭 | 645 |
| 第三節 修験道における日月星の祭 | 750 |
| 第四節 修験道における小祠の祭 | 873 |
| 第五章 修験道における運勢と卜占 | 996 |
| 第一節 修験道における吉凶と運勢 | 997 |
| 第二節 修験道の卜占 | 1133 |
| 第六章 修験道の巫術と憑祈禱 | 1252 |
| 第一節 修験道の巫術 | 1253 |
| 第二節 修験道の憑祈禱 | 1390 |
| 第七章 修験道の祈禱 | 1509 |
| 第一節 修験道の息災護摩 | 1510 |

| | |
|--------------------|------|
| 第二節 修験道の諸尊法 | 1573 |
| 第八章 修験道の調伏と憑きものおとし | 1684 |
| 第一節 修験道の調伏法 | 1685 |
| 第二節 修験道の憑きものおとし | 1791 |
| 第九章 修験道の符呪とまじない | 1903 |
| 第一節 修験道の符呪 | 1904 |
| 第二節 修験道のまじない | 2031 |
| 第十章 修験道における儀礼の論理 | 2126 |
| 第一節 修験道儀礼の構造 | 2127 |
| 一、修験道の諸儀礼 | 2127 |
| 二、諸儀礼のモチーフ | 2135 |
| 三、諸儀礼のメカニズム | 2152 |
| 四、修験道儀礼の構成要素 | 2170 |
| 五、修験道儀礼の構造 | 2192 |
| 第二節 修験道儀礼の機能 | 2203 |
| 一、修験道儀礼の構造と機能 | 2203 |
| 二、修験道儀礼の顕在的機能 | 2207 |
| 三、修験道儀礼の潜在的機能 | 2285 |
| 四、修験道儀礼のモチーフと機能 | 2293 |
| 第三節 修験道儀礼と宗教的世界観 | 2307 |
| 一、諸修験道儀礼の世界観 | 2307 |
| 二、修験道の宇宙観 | 2325 |
| 三、修験道の崇拜対象 | 2339 |
| 四、宇宙、崇拜対象と人間 | 2356 |
| 五、効果の儀礼に見られる世界観 | 2371 |

以 上

論文審査の要旨

「修験道における宗教儀礼の構造」

本論文は次の10章からなる。

- 第1章 修験道研究の問題点
- 第2章 修験道儀礼の研究方法
- 第3章 修験道の修行と験術
- 第4章 修験道の祭
- 第5章 修験道における運勢と卜占
- 第6章 修験道の巫術と憑祈禱
- 第7章 修験道の祈禱
- 第8章 修験道の調伏と憑きものおとし
- 第9章 修験道の符呪とまじない
- 第10章 修験道における儀礼の論理

修験道は平安時代末に至って一定の体系を形づくったものであるが、爾来、呪術・宗教的な基盤に立つこの宗教は、成立的な組織をもち、とくに日本の庶民の宗教生活に大きな影響を及ぼして来た。

しかし修験道の研究となると、従来、組織的、体系的にまとめられたものは殆んどなく、僅かに概観的なものや教団史関係のものにとどまっていた。本論文の提出者はかかる研究状況のなかにおいて、とくに修験道の中核をなす宗教的儀礼を宗教学の立場から組織的、体系的に究明し位置づけようとする。

まず提出者は本研究において、現在の宗教学の研究における儀礼論及び象徴論を吟味、選択して機能的な構造分析の立場をとり、とくに修験道の儀礼を修験道の象徴体系と行為体系との連関において究明することを問題の中心場面とする。ただし、個々の儀礼ないし儀礼一般が象徴するところの意味を、日常的な社会生活に直接的に照応せしめるのではなく、それと

連関はあるが、第一次的には、修験道の宗教的世界観との連関において捉えようとする。すなわち、修験道儀礼は基本的には、修験道の宗教的世界観を象徴する体系であると考え、儀礼中の諸行為、諸装置等を象徴的体系を構成する象徴的行為として把握し、その意味を修験道の宗教的世界観との連関において分析し、解明しようとするのである。

そのための研究操作として、提出者はまず修験道の全儀礼を類別して、その各類を、全儀礼体系を統合的に構成するところの単位儀礼として設定し、これを上の観点から分析解明し、さらに次には、これらの各単位儀礼を全儀礼体系との連関において位置づけようとする。

その単位儀礼として、提出者は入峰修行、験術、不動法、神祭、日月星、小祠の祭、吉凶と運勢、卜占、巫術、憑祈禱、調伏法、憑きものおとし、符呪、まじないをあげる。そして、これらの各単位儀礼のそれぞれについて、儀礼中の種々の象徴的行為や象徴の意味がいかなる主題（モチーフ）のもとに、どのように相互に連関しあっているかというメカニズムを分析し、これをその単位儀礼の構造としてとらえる。そして修験道の宗教的世界観との連関においてこの構造の意味を解明するのである。この上で、さらに修験道の全儀礼体系について、そのメカニズムを分析し、そのモチーフをやはりその宗教的世界観との連関において解明し、このなかにおいて各単位儀礼の相互的連関を理由づけ位置づけるのである。なお、提出者はこれらの研究操作において文書資料と調査資料を使用するが、文献資料としては諸教団における修験道儀礼の次第書、儀軌、修法書、切紙、手文、覚書、経本、符呪など第一次資料をはじめ、これらを解説、注釈した教義書及び各種の出版及び筆稿の類を用い、調査資料としては、諸家の調査報告を参照するが、とくに主として、五流修験及び羽黒修験について、提出者自身の参与調査をはじめ、面接、意見、観察の諸調査によるものを用いる。主要資料としては文献資料をとるが、それをヒントとし、下敷きとして、上のような問題構成を実態調査によって肉づけてゆくのである。

「修験道における宗教儀礼の構造」

る。(以上 第1, 第2章)

以上のような問題と研究操作と資料の扱いや調査方法によって、提出者は各単位儀礼を次のようにまとめる。

修験者は、まず入峰修行や不動法によって、不動明王と霊能的なはたらきの上で同化をし (identification), その霊能を行使しうる能力を獲得しなければならない。そして験術にみられるように、その能力を人々に顕示することも行なわれる。(第3章)

また神祭, 日月星, 小祠の祭によって常時崇拜対象と交歓疎通している。(第4章)

修験者はこうした準備の上で、主として信者の災厄除去の依頼に応じて、卜占 (第5章), 巫術, 憑祈禱を行ない, 災厄の原因を知る。これらのうち、とくに憑祈禱は修験者が好んで行なった儀礼である。これは修験者が崇拜対象と同化した上で、その眷属を駆使して災厄の原因を知るものであるが、災厄の原因は多くの場合、生霊, 死霊, 邪神, 邪霊の所為とされる。(第6章)

災厄の原因がわかると、これを除くための儀礼が行なわれる。そのための最も一般的なものは、息災護摩, 諸尊法, 日月星, 小祠の祭のように崇拜対象に祈願をこめるものである。(第7章) けれども、修験道では祈願よりも修験者が不動明王と同化した上で、地主神的性格をもつその眷属を使役して、邪霊, 邪神の邪悪な活動をやめさせる調伏法や憑きものおとし (第8章) および符や呪具を操作して同様のことをする符呪, まじないの方がより広く行なわれている。(第9章)

以上のような単位儀礼が修験道の全儀礼体系を統合的に構成するのであるが、その統合的な構造連関から、儀礼の象徴的行為体系を提出者は次のように解明する。すなわち、修験道の儀礼は、これらを全体としてみると、修験者が崇拜対象と霊能的なはたらきにおいて同化し、その眷属を操作して (manipulate), 災厄の原因が邪霊, 邪神の行為であることを知

る。そこで、これを除くことによって災厄除去 (exorcism) をなすという構成になっているとする。(第10章)

そこで、結論的にいえば、修験道儀礼の構造は、現実世界における日常的なものを超えて、これと区別される超自然的な靈的世界における、普遍的神格と地主神的性格をもつ個別的神格及び災厄のもととなる邪神、邪霊という三種の神格の存在と、修験者が修行の上で普遍的神格と同化し、個別的神格を使役することによって、邪神、邪霊を制御することが可能であるという信念を支える宗教的世界観を基礎にして成立していることを、提出者は究明している。(第10章)

以上が本論文の内容上の綱格と研究方法及び資料の取扱いであるが、最近の社会人類学及び社会学の学説とくに構造機能論をふまえて、修験道の全儀礼体系をその象徴体系と行為体系との統合的な相関性において捉えようとする宗教学的な研究であって、修験道に関するかかる包括的組織的な研究は未だ曾つて試みられていなかった。ことに儀礼の行為体系は、社会学的及び社会人類学的には、従来多くの場合、これを日常的社会的なものとの直接的な連関ないし相応において究められて来たが、提出者は、この分野における最近の研究傾向に徴してこれを第一次的には世界観或いは信念体系との統合的連関において捉えようとする。これらの二点において本論文の成果は注目に値する業績である。

しかしながら、かかる特色を有するものであるだけに、その立場の選択や学説の依用については、系統的にまとまった十全な吟味と究明とを必要とするが、本論文においては、この点に関してより十全な究明を期待したいものがある。けだし、修験道は「呪術・宗教的」な地盤と段階に発してアニミスティックな観念体系を有し、かつプレアニミスティックな呪力主義の領域が大きく関与している。そして、かかる宗教的及び呪術的なものに支えられている「超自然的なもの」との関係の仕方は、とくに教团的組

「修験道におけ宗教儀礼の構造」

織の形態を有し、長い年月にわたる経過を経ており、他の多くの宗教体系との極めて密接な「習合」をなして来ている。もっとも提出者は、これらの点に関して、修験道をその発生や伝播経路或いは習合過程について問題の中心をおくことを避けている。また修験道の儀礼や信念が民間信仰の領域に拡散して夥しく行なわれている問題領域をも中心主題から除いている。即ち歴史的研究や民俗学的分野の研究に主題の中心をおかず、教団形態における修験道の儀礼体系の分析と解明に問題の範囲を限っていることは賢明である。

しかし、かかる範囲において、上記のような一般的な問題点があげられなければならない。個々の点についていえば、たとえば象徴化の理論的究明が、かかる研究の性質上、より深く要求されるであろうが、とくに修験道儀礼における行為体系をその世界観の体系に照応せしめることは注目すべき観点であるけれども、更に次にはこれらを地上的日常的な行為や観念の体系との連関において重ねて分析し解明する企図をより深く展開すべきであったとおもわれる。おそらく、そのことによって本論文はより輝やかしいものになりえたであろう。また、歴史的研究や民俗学的研究の分野においてではなく、上のような研究場面を修験道の成立的な教団機構のなかにおいてとらえていることはよいが、それだけに、教団構成の枠組や修験者の資格、修習、業態、さらには信徒系列及び仏教その他の宗教々団との関係等、本論文研究の主題に対するいわば外面的用意として提出者が既にもっている知識を整理して識すべきであったと考える。

少々同様なことが資料処理についてもいいうるであろう。民俗学的資料としての宗教的ないし呪術的儀礼を取りあげるのではなく、成立的組織を有する教団的機構における儀礼体系を当面の問題場面とするのであるから、資料の成立や依用の範囲を穿鑿し、これに関して、全教団とはいわぬまでも、提出者が直接に当たった諸教団について、その出入を正確に比較検討した上、その結果にもとづいて一般的な論述をなすべきであった——提

出者はかかる前提において論述をすすめているが、十分な比較結果の叙述を省いている——。時代の変化、習合、伝播等のことも、資料批判というこの取扱い場面で、かなり関説する場所を得たであろう。また、調査方法についても、いわゆる精密調査のごときものは、かかる研究主題においては、必ずしも必要でなく、また可能でない場合があるが、提出者の行なった調査についても、その結果の客観的証左を概括的にではなく、より詳細に記入すべきであったと思われる。

以上に列挙した問題点は、本論文の難点というよりは、よりよき程度にまで遂行されることを期待する諸点であって、本論文において取り上げられた問題や研究上の方法と操作及び研究結果の範囲についていえば、本研究が従来、企てることの出来なかった包括的組織的な成果を得ていること、またとくに宗教学の分野においてはもとより、連関分野における最近の研究傾向をふまえて、高い学的水準において研究操作が遂行されていること等の理由によって、本論文の提出者は文学博士の学位を授与されるに値すると考えられる。

| | | |
|-----|----------------------------|-----------|
| 主 査 | 慶應義塾大学教授 ドクトウール・エス・レットル | 「民族学」 |
| | | 松 本 信 広 |
| 副 査 | 慶應義塾大学教授 | 文学博士「宗教学」 |
| | | 石 津 照 璽 |
| 同 | 慶應義塾大学教授 | 文学博士「民族学」 |
| | | 池 田 弥 三 郎 |